

「皮相上滑りの開化」への疑念と民権思想の原基 — 一分水嶺としての「征韓論争」と群島性のヴィジョン —

柴 田 庄 一

はじめに

たとえば、明治維新の前の年、慶応3年（1967年）の1月に生を享け、ちょうど世紀末に当たる1900年（明治33年）9月、パリ万国博の年に欧州留学の途^とに上り、二年間にわたるロンドン生活を体験した漱石・夏目金之助は、大正5年（1915年）12月の死の直前にいたるまで、ほとんど弛^{たゆ}みなく続けられたそのひとときわ鮮やかな文業によって、日本近代文学の大成者のひとりとして目されている。たしかに、その成熟期の作品群は、「自由と独立と己れ」とに充ち満ちた「近代」にこそ生まれ合わせた人間特有の「個人主義」の実態を鋭く剔抉するとともに、近代人的心性の奥底を徹底的に掘り下げようと図った点で、近代日本文学の稀有な高峰ともいべき達成を示している。とはいえ、明治天皇の崩御を契機に、「明治の精神」に殉じる「先生」を主人公とした代表作のひとつ『こころ』を執筆した夏目漱石にしてからが、他ならぬ自分自身の時代に他ならなかった近代日本の草創期のありようを、手放しで謳歌していたのかといえ、決してそういうものではありえなかった。

維新以来すでに半世紀に近い歳月^{けみ}を閲した明治44年8月、夏目漱石は、数ある講演のなかでも「私の個人主義」とならび、もっとも高名な「現代日本の開化」において、西洋の開化（近代化）が内発的であったとすれば、「現代日本の開化」は、あくまでも「外発的」であり「皮相上滑り^{ひそううわすべ}の開化」（三好行雄編『漱石文明論集』岩波文庫、34ページ、以下ページ数のみを記すこととする）に他ならないと痛罵しつつ、「こういう開化の影響を受ける国民はどこかに空虚の感がなければならぬ」「不満と不安の念^{いた}を懐かなければなりません」（33）との苦い感慨を付け加えることを忘れていない。要するに、「急に自己本位の能力を失って外から無理押しに押されて否応なしにそのいう通りにしなければ立ち行かないという有様」（26-27）に直面しては、ただただ「涙を呑んで上滑りに滑って行かなければならぬ」（34）し、「また滑るまいと思って踏張るために神経衰弱になるとすれば、どうも日本人は気の毒と言わんか憐れと言わんか、誠に言語道断の窮状に陥ったものであります」（36）とも断定せざるを得なかったのである。

このように「氣息奄奄として今や路傍にしんざんしつつあるは必然の結果として正に起るべき現象」（35）であったとすれば、人一倍数奇な幼少年期を過ごし、長じてからも、なお、さながら一生に二世を経るがごとく、漢学と洋学の大きな懸隔^{みは}に眼を瞠り、

西洋と日本との落差に苦しみ続けた漱石の悩みはあまりに深く、胃潰瘍と神経衰弱という、まさに身心ふたつながらの病弊をともに併発せざるをえなかったのも、また、無理からぬところであったと言うべきかも知れない。

しかしながら、こうしたアンビヴァレントな時代への想いは、何も漱石の世代にのみ限った話ではない。「皮相上滑りの開化」への疑念は、もしかしたら、すでに「維新革命」を準備した、明治の第一世代をも見舞っていたものではなかったかとも付度されるのである。では、「外発的」とも、あるいはまた、「皮相上滑り」とも指弾される「開化」とは、いったいどういうものであったのか。さらに、そのような頹落は、そもそもいかなる事情に起因すると言えるのだろうか。ここでは、明治維新の最大の立役者であり、新体制の黎明期を一身に担った西郷隆盛に焦点を当て、政治体制の変革とそのあまりに急激な変質といった時代の動向を考察することを通して、たとえ歴史に「もしも」は禁物であるとしても、あわよくばありうべかりしその後の可能性についても望見してみたい¹⁾。

明治維新への胎動とその時代的背景

周知のように、「明治維新」への胎動は、嘉永6年(1853年)6月、東インド艦隊の軍艦4隻を率いて開港を迫ったアメリカの提督ペリーの浦賀沖来航に端を発する。江戸幕府は、たちまちその対応をめぐる紛糾し、攘夷か開港か、左幕か勤皇かを基軸に国論を二分する大騒動へと発展する。一時は、公武合体論とも絡み、幕閣の無定見にも災いされて、様相は一転二転しつつ錯綜をきわめるが、第一次長州征伐における軍務参謀西郷隆盛の寛大な処置、ひいては坂本竜馬のとりなし奔走や仲介による薩長同盟の締結(1866年3月)を経て、第二次長征の潰走にいたるや、いよいよ幕府軍の頹勢が覆いがたいものとなる。やがて、慶応3年(1867年)10月、土佐藩士後藤象二郎や脱藩浪士坂本龍馬らの建議による大政奉還と、同年12月の王政復古のクーデター、さらには翌慶応4年(1868年)1月、戊辰戦争の緒戦に当たる鳥羽・伏見の戦いでの敗北を契機に、徳川15代将軍慶喜による恭順の意の表明に及び、大勢はついに決して、最終的な決着は、二人のキーパーソンによる膝詰談判へと委ねられることになった。

二人のキーパーソンとは、他でもなく、68年4月11日、江戸城無血開城を実現させた幕府の最高司令官勝海舟と薩摩藩士西郷隆盛の大立者がそれである。ふたりは、とも

1) 因みに、西郷隆盛は、新政府の筆頭参議の任にあった明治6年(1873年)9月当時、在ドイツの留学生(寺田平之進)に宛てた書簡のなかで、すでにこう記していたのである。「西洋の風は日々盛んに相行われ候得共、皆皮膚の間のみにて脳髓に至らず、口には文明を唱え候得共、所業は全く懶惰にて、歎息の次第に御座候。人気は漸々弱く相成り、此の末如何成り行き候ものやと帰する所を知らず候。御遠察下さるべく候」(『西郷隆盛全集 第三巻』大和書房、411)。

に一介の下級武士から身を起こし、激動する歴史の奔流のなかで、期せずして大役を任せられるに至りはしたが、たとえ身分制の最上層階級に属していたとはいえ、私利私欲とは一切縁がなく、何を措いてもまずは天下国家の経世済民をこそ最優先に考えようとする点にその共通項を有していた。彼らは、いずれも徹頭徹尾、知行合一を旨とした実践的政治家であったがゆえに、自らの切実な経験を踏まえて精神の鍛錬に精進するとともに、変化の激しい世相に眩惑され、ともすれば見落とされがちな経緯の大本を、決して手放さなかったことが大きかったと言えるだろう。すなわち、一方は、その出自からして、江戸都府の庶民に近く、今ひとりは、辺境の地における草莽の暮らしぶりの視点を失わず、また同時に、「公」という問題意識を片時たりとも忘れることはなかったのである。

維新前夜の思想的経絡—横井小楠の「国是三論」と坂本龍馬の「船中八策」

あらためて強調するまでもなく、歴史の転換期における懸案の克服には、いくつかの具体的条件が欠かせない。なかでも重要なのは、時代の矛盾を別決するに足る慧眼とそれにもとづく社会変革のグランドデザインが提示されていること、そして、そうしたプランを実現するに資するだけの時の勢いというものであろう。加えて、いずれの場合にも、それぞれの用務に相応しい「人」を得ることこそ緊要であることは言うを俟たない。では、幕末から維新前夜にいたる胎動期においてはどうかであったか。よく言われるように、明治維新は、何かしら明白で一貫した思想信条や政治的プログラムに則って遂行された運動ではない。したがって、その思想的淵源を突き止めることは必ずしも容易ではないし、ましてや特定の理念や展開の理路を詳らかにすることなどほとんど不可能に近いとしなければならない。そのことは百も承知で、ここではあえて、勝や西郷とも互いに面識や親交があり、人格的にも一目置き合っていた人物群のなかから、ふたりの文書を取り上げてみたい。横井小楠の「国是三論」と坂本龍馬の「船中八策」がそれである。

幕末維新期の幕臣のうち、ひときわ群を抜いた傑物というまでもなく勝海舟であったが、彼は、明治の世になって記者に語った『氷川清話』（講談社学術文庫）のなかで、こう陳べている²⁾。「おれは、今までに天下で恐ろしいものを二人見た。それは、横井小楠と西郷南洲とだ。横井は、西洋の事も別に沢山は知らず、おれが教えてやったくらいだが、その思想の高調子な事は、おれなどは、とても梯子を掛けても、及ばぬと思ったこ

2) 海舟には、明治になってからの回顧談に、実に闊達な屈託のない座談が数多く残されている。『氷川清話』もその内のひとつであるが、^{よお}齡古希を数え、もはや怖いものなぞ何ひとつとしてない境涯にあって、誰憚ることなく談論風発、^{げつたん}思いの丈を存分に開陳したもので、まことに興味深い読み物となっている。とりわけ人物月旦は秀逸で、さすがに鋭敏に人を見抜く慧眼を有していたことが窺える。

とがしばしばあったヨ。おれはひそかに思ったのサ。横井は、自分に仕事をする人ではないけれど、もし横井の言を用いる人が世にあったら、それこそ由々^{ゆゆ}しき大事だと思ったのサ」(68)。

横井小楠は、百五十石取りの肥後(熊本)藩士の二男として生まれたが、^{くにもと}国許では容れられず、むしろ親藩越前(福井)藩主の智恵袋として政治顧問格で取り立てられ、一時は松平春嶽(慶永)の懐刀として江戸表でも重きをなした。その論ずるところは、主著といえる「国是三論」に詳しい。そこでは、時勢のしからしめるところ、殖産興業の隆昌と「対等開国」による通商貿易の推進の必要性とならんで、海軍力の整備を中心とした富国強兵に努めることの重要性が説かれている³⁾。また、一源としての文武両道を強調し、「君臣ともに、文武の道を二つに分けてはならない。その自覚の上に立って、君主は慈愛・恭儉・公明・正大の心もち、(中略)至誠の心をもって部下を率い、あわれみの心をもって民衆を治める」(『日本の名著 佐久間象山 横井小楠』中央公論社、334-335) ことこそ肝要であると、堂々の高説が披瀝されている。さらに、「いまの世の中に処していくためには、成否にとらわれずに正道を立てとおすことが大切である」(464) からして、中国の帝王堯舜三代の徳政を範とし、仁をもってする徳義第一の政治を大本に据え、そうした仁政の大義を広く世界にまで押し広めていこうとする。つまりは為政者が践むべきもっとも高潔な立ち位置を指し示したもので、その「思想の高調子」は、さすがの勝にも恐れられた所以であると言っていい(一仮に、これをしも、^{ころう}固陋に過ぎると一蹴するなら、それはひとえに、実利覇道の政治理念に^{なづ}泥み過ぎているからに他なるまい)。

小楠にはまた、合議制の提唱をも含む「論策七条」と題する小論があって、そこでは「門閥を問わず、有能な人物を登用せよ、意見の交流を自由にし、世論に従って公共の政治を行なえ、海軍を興し兵力を強くし、政府直属の貿易を行なえ」(同上、401)などを骨子とする具体的な政策提言がなされている。後に触れる龍馬との関連で、見逃せない文章であると言えるだろう。

小楠が、決して一藩のみの活動で終わらなかったように、一介の土佐(高知)郷士に過ぎなかった坂本龍馬もまた、単に藩の枠内では飽き足らず、若干26歳にして早々に出奔、とかくの後、勝海舟の門を叩いて深く親炙^{しんしや}。やがて、勝組のいわば番頭格の役割を担い、幕末の^{せつしよせつしよ}切所切所で端倪すべからざる活動をなした人物である。そうした脱藩者を重用して憚らなかった勝もまた、時代状況を鋭く読み解く明敏な洞察力と、人材策を

3) 勝海舟は、後年また、「おれが米国から帰った時に、彼(小楠)が米国の事情を聞くから、いろいろ教えてやったら、一を聞いて十を知るといふ風で、忽ち彼の国の事情に精通してしまったヨ。」(『水川清話』、77)とも語っており、特に海防論には、勝の影響が少なくなかったことが推測される。

講じるに際し、固定的な門閥や禄高に囚われず、真に才能ある人士を登用するだけの開明性を具えていた。その端的な表われは、元治元年（1864年）軍艦奉行の任にあつて、神戸に海軍操練所を開設するや否や私塾の海軍塾をも興し、その塾頭に龍馬を抜擢するという思い切った行動に見て取ることができる⁴⁾。ここで論じる「船中八策」（慶応3年6月）は、師事する勝にも使喚され、大政奉還を建築するに際し、その実現を見越して、新政府の理念的大綱を定めようとしたものである。その一部を引けば、「一、上下議政局ヲ設ケ、議員ヲ置キテ、万機ヲ参賛セシメ、万機宜シク公議ニ決スベキ事。一、有財ノ公卿諸侯及ビ天下ノ人材ヲ顧問ニ備ヘ官爵ヲ賜ヒ、宜シク従来有名無実ノ官ヲ除クベキ事。一、外国ノ交際広ク公議ヲ採リ、新ニ至当ノ規約ヲ立ツベキ事」（宮地佐一郎『龍馬の手紙』講談社学術文庫、588）等と謳っており、明らかに横井小楠の「論策七条」を踏まえた内容となっている⁵⁾。

このように、藩の境を超えて思考し活動した小楠や龍馬は、当然のことながら進取の気性に富んでおり、殖産興業と開国、公議会の開設等を不可避とするその立論においても、すこぶる先進的かつ開明的であったといえる。むろん大政奉還それ自体は、厳密にいうなら、公武合体論の範疇を大きく超え出るものではなかったが、その理念は、「広く会議を興し、万機公論に決すべし」を第1条とする「五箇条の御誓文」（慶応4年3月14日）の先蹤をなしたことに疑う余地がない。ただ、徹頭徹尾理論家だった横井小楠や、

4) 神戸海軍操練所創設の深謀遠慮について、勝はこう述べている。「文久の初、攘夷の論甚だ盛にして、摂海守備の説、亦暮々たり。予建議して曰く、宜しく其規模を大にし、海軍を拡張し、営所を兵庫・対馬に設け、其一を朝鮮に置き、終に支那に及ぼし、三国合縦連衡して西洋諸國に抗すべしと」（『水川清話』、219）。日清韓の防備を堅め、もって東アジアの平和と繁栄を築こうとするこのような発想は、あくまでも日中韓の協定を基礎に、欧米列強の脅威に対処しようとしたパトリオティズムのそれに他ならないのであって、後に見るように、決してナショナリズムと軌を一にするものではなかったことを銘記したい。それはまた、日清戦争への反対論によっても明快に確かめられるところのものである。「日清戦争はおれは大反対だったよ。（中略）おれなどは維新前から日清韓三国合縦の策を主唱して、支那朝鮮の海軍は日本で引受くる事を計画したものサ。今日になって兄弟喧嘩をして、支那の内輪をサラケ出して、欧米の乗ずるところとなるくらいのものサ」（同上、269）。

5) 当時、こうした先進的な議案は、他にもなくまた西郷隆盛の口にしていたところのものであった。たとえば、イギリス公使館付きの日本語書記官として幕末維新期の激動をつぶさに見聞したアーネスト・サトウは、慶応3年（1867年）8月の日記に、「わざわざ大坂に向向いてきていた旧知の西郷吉之助に会いにいった。かれは大君政府にかわって、『議事院』すなわち国民議會を樹立すべきだと論じた。」「（それは）イギリス風の議會（Parlament）というよりも、むしろアメリカ風の議會（Congress）というべきだろう」（萩原延壽『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄5 外国交際』朝日文庫、279）と記している。どうやらここにも、1860年、咸臨丸でアメリカに渡った勝海舟の影が明らかに差しているのではないかと思われる。

政治家であり続けた勝海舟に対するとき、もう一方の竜馬は、武士もまた交易に従事すべしとの観点に重きを置いていたので、新政府への出仕には耳を貸さず、すでに慶応元年（1865年）5月、長崎で設立していた亀山社中（一脱藩を赦されてからは「土佐海援隊」と改称）に拠り、広く通商貿易をもって海外に雄飛しようと目論んでいたのが一。

キーパーソンとしての勝・西郷と「江戸城無血開城」の意義

歴史を直線的な発展史観で捉える視点からは、往々にして見逃されがちになってしまうが、大事が成就するには、歴史的偶然が作用することが少なくない。いわばパズルのピースが順次埋め合わされていくように、いくつかのコマの巡り合わせが合致したがゆえに、大きな情勢の変化を招来するというようなことが起こりうるのである。この意味で、勝と西郷との関係には、特に注意を払ってみることが必要である。

先に挙げた、小楠と西郷を賞讃する勝の評言には、実は、次のような後段が続いている、「その後、西郷と面会したら、その意見や議論は、むしろおれの方が優るほどだつたけれども。いはゆる天下の大事を負担するものは、果して西郷ではあるまいかと、またひそかに恐れたよ。（中略）おれはなほ、横井の思想を、西郷の手で行はれたら、もはやそれまでだと心配して居たに、果して西郷は出て来たワイ」（『氷川清話』、68）と。

西郷吉之助隆盛は、英明の誉れ高かった薩摩藩主島津斉彬なりあきらのひとかたならぬ寵愛を受け、早くからその側役そばやくに任用されて頭角を現わす。やがて京や江戸表でも情報収集や各種要人との折衝において縦横無尽の活躍をほしいまま「恣」にしたが、藩主への忠誠心と畏敬の念の篤さゆえに、それらはすべて公武合体論の路線上においてであった。ところが、人一倍大局観に秀でた西郷は、政治情勢の変化に敏感に反応しつつ、いつ何時なんどきでも転軸機を押しうる果敢な行動力にもまた欠けてはいなかった。それが証拠に、大政奉還に打って出た慶喜に、実権を手放す意思など全くないことが判明するや、たちまち武力による倒幕運動へと大きく転進していったからである。かくして、江戸城明渡しの直談判までは、さながら騎虎きこの勢いであった⁶⁾。

奇しくも西郷とは敵味方の総帥として相見まみえることになる勝麟太郎海舟は、無役の旗本勝小吉の長男として江戸の本所しゅっしょうに出生した。もともと貧しい蘭学塾を切り盛りする

6) ふたたび、勝の言を引くなら、こうである。「世の中の事は、時々刻々変遷極まりないので、機来り機去り、その間実かんに髪はつを容れない。かういふ世界いに処して、万事小理屈をもって、これに应ぜうとしても、それはとても及ばない。世間は活きて居る。理屈は死んで居る。この間の消息しょうそくを看破するだけの眼識きがあったのは、まづ横井小楠で、この間に処していはゆる気合きあいを制するだけの胆識いがあったのは、まづ西郷南洲だ。おれが知人の中で、ことにこの二人に推服するのは、つまりこれがためである」（『氷川清話』、338-339）。

ことで生計を立てていたが、時の老中安部正弘の諮問に応じ、海防を堅くするための「海防意見書」を提出、海国兵備のあり方と、その予算調達のためにも、東アジアとの交易の要を建築して存在を顕わす。のちに長崎での海軍伝習に参加、島津斉彬とも面識を得るに至った。勝の美質は、機を見るに敏であり、江戸開府以来の未曾有の国難に際会し、幕府全体を覆う疲弊と倦怠にただならぬ雰囲気のあることを見抜く透徹した眼力を有していたばかりか、そのことを大胆に直言する胆力にもまた欠けるところがなかった点であろう。おそらくは、元治元年（1864年）9月、西郷との会談においても、追い詰められた「幕府の内情」、すなわち幕吏の無為と懦弱、有為な人材の払底、財政事情の逼迫などを、いかにも率直に腹藏なく語り聞かせたもののように推察される。その時のありさまを、西郷は大久保一蔵（利通）宛の書簡に、「幕府の内情も打ち明けられ候に付き承り候処、誠に手の付け様もこれなき形勢と罷り成り候事に御座候」（『西郷隆盛全集 第一巻』大和書房、397）と記した上で、「勝氏へ初めて面会仕り候処、実に驚き入り候人物にて最初は打叩くたた つもり賦にて差し越し候処、頓と頭を下げ申し候。どれ丈だけケか智略のあるやら知れぬ塩梅あんばいに見受け申し候。先ず英雄肌合の人にて、佐久間より事の出来候儀は一層も越え候わん。学問と見識においては佐久間拔群の事に御座候得共、現時に臨み候ては、此の勝先生とひとくほれ申し候」（399）と、手放して感服の衷情を書き綴っている。雄藩のみならず、幕府においてもまた、ただおのれのことにのみ汲々とし、他を顧みる暇いとまがないのだとしたら、このままではもはや幕府は保たないと見限った勝の言動に接したことが、倒幕やむなしと翻意する、直接のきっかけになったのではないかと思われる。

それにつけても、討幕運動の最終局面において、勝と西郷が、単に旧知の間柄だったというだけでなく、むしろ肝胆相照らす仲でさえあったことは、稀有な歴史の僥倖かぞに算えられてしかるべきものであろう⁷⁾。ふたりはいずれも、欧米列強による外圧に直面し、幕府と諸藩が跋扈ばっこしつつ、無用な対立を繰り返している場合などではないとの状況認識を共にするとともに、自己批評にもまた厳にして、幕府の命運や藩益などはまったく度

7) 文久元年（1861年）6月、勝の従者として薩摩に随行し大西郷の饗応にも与ったという新谷道太郎は、言わず語らずのうちに通じ合うふたりの姿を、たとえば次のような談話に残している。そもそも元治元年こそ勝と西郷との最初の出会いと目されるので、それを遡る文久元年という時期についてはいささか問題なしとしないが、そうした疑問をさき措くとすれば、語り伝えられるエピソードは、いかにもさもありませんと思われる情景を描き出して印象的なものである。「それから、御馳走をしますと言われたから、何が出るかと思ったら、西郷様が、薩摩芋を自分で焼いて皮をむいて、箸はしにさして勝様に出されますと、勝様は頂いて食べられます。また、貝のお汁が出ますと、汁を吞んで、貝のカラを勝さまが、杯洗の中へ、ザラザラとあげられました。すると、西郷様がまた同じようにザラザラとあげられます。私はそれを見て、何だか訳があるように思われて、その後色々考えました」（『新訂海舟座談』ワイド版岩波文庫、327-328）云々。

外視し、専ら^{もっぱ}列島をひとつとして捉える視野と展望の上に立って、中央政府の樹立と国民国家の必要性を痛感するに至ってもいたのである。そんな勝に、江戸幕府の幕引きに当たって、事実上、幕閣トップの役廻りが割り当てられたのはいかにも皮肉なことではあったが、百万都市江戸の城下が焦土と化すことを免れたばかりか、無辜^{むこ}の大衆の人命が損なわれず、また塗炭の苦しみをほとんど味わわずに済んだのも、ひとえに事に処して時宜に叶った最適の人物を得たからに他ならなかった⁸⁾。

西郷隆盛の英断と「維新革命」の「革命」たる所以のもの

江戸城無血開城ののちにも、上野寛永寺に陣を布いた彰義隊をはじめとし、旧幕府側の抵抗は続いた。一連の「戊辰戦争」がそれであるが、西郷は、奥羽越列藩同盟の鎮撫の見通しがつき、帰趨がほぼ決しかけた段階で、前線を離れ、鹿児島に帰郷する。察するところ、若き命を散らした兵士たち（一なかには次弟の吉二郎も含まれていた）への^{じくじ}忸怩たる思いと「わが事了れり」との鬱勃たる心意に苛まれてでもあったろう、^{しょうさんみ}正三位の位階の返上を申し出で、いっさいの賞典禄をも謝絶してひたすら帰農の生活を目指したのである（—これは、しかし認められず、のちに賞典学校設立のための原資となった）。『南洲翁遺訓』にいう「命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり」（『西郷隆盛／乃木希典』新学社、37）を、まさに地でいく行動でもあった。

とはいえ、時代が直面するいくたの難題は、明治維新最大の立役者に対し、隠遁の猶予を与えなかった。度重なる出仕要請^{もた}黙しがたく、明治4年（1871年）6月、筆頭参議に就任してからの西郷は、同じく参議の江藤新平なども囚り、相次いで矢継ぎ早な改革に着手する。その事績には、「学制の公布」や裁判をも含む司法制度の整備など注目すべきものが少なくないが、なかでもとくに重要なのは、廃藩置県の断行と華士族の秩禄処分計画の策定、国民皆兵制への移行であろう。同時に、^{えいた}穢多非人の廃止や人身売買の禁止、水呑百姓の解放と職業選択の自由の許可なども併せて考えるとき、それらがいかに封建制の打破に貢献したかはあまりにも明白だと言わねばならない。わけても、軍

8) 海舟は、戦国時代の武将北条早雲に言及した^{くだり}件で、早雲が、関八州をよく^{しゅうらん}取攬しえたのは、ひとえに「租税を軽減し」「民心を服し得た」（『水川清話』、131）からに他ならなかったと強調している。民生を第一とし、人心を平らかにすることこそ政治が意を用いるべき最大の要諦であると見なした勝の言説に、^{たみぐさ}民草の切なる思いに立脚した、ことばの真の意味における民権思想のオリジンとでもいうべきものを見ておかななくてはならない。そして、それは、むしろ「租税を薄くして民を裕かにするは、即ち国力を養成するなり」（『南洲翁遺訓』『西郷隆盛／乃木希典』所収、新学社、32）と唱えて止まなかった西郷の心根にもまた明らかに通じるものであった。

事面を専一的に司ってきた武士階級が、国民皆兵（徴兵制）によって士分を失うに至るといふことは、曲がりなりにも特権的な身分制崩壊への大きな第一歩となるものに他ならなかった。してみれば、この決断のなかにこそ、明治維新最大の革命的意義を見て取ることができよう。なぜなら、たとえトップは替わっても、権力構造や社会組織に何らの変更も生じないなら、それは一切「革命」の名に値しないからである⁹⁾。

それにつけても見逃せないのは、士族の解体にせよ、幕藩体制の打破にせよ、それらはいずれも、勝や西郷らが自ら拠って立ってきたものの全^{まった}き転覆を意味したということである。彼らはいわば、呵責な自己否定を通じて、大きな構造改革を成し遂げたのであって、国民全体をひとつとする「公」の利害を優先させ、私利私欲や藩益をすべて擲^{なげう}ったからこそ維新革命であったと言っていい¹⁰⁾。

新政府の分裂と変質—「岩倉使節団」の欧米派遣と「明治六年政変」の実情

ところで、西郷隆盛の先導した政策の数々は、そのほとんどが、いわゆる「留守政府」の手になるものであった。それというのも、新政府は、着々と体制づくりを進める一方、欧米先進諸国視察のため、参議岩倉具視を特命全権大使とする大規模な「遣米使節団」を編成していたからである。当初一年の予定であった岩倉使節団は、結局、明治4年（1871年）11月から明治6年（1873年）9月にまで及ぶ一大プロジェクトとなり、こと視察に関しては、なるほど精力的に各国を巡歴して修学に努めたが、今ひとつの目標であった不平等条約の改定（一領事裁判権の撤廃と関税自主権の獲得）のための下準備にかけては、ほとんど見るべき成果を挙げるができなかった¹¹⁾。そしておそらく

- 9) 士族の解体と国民皆兵制への移行には、ひょっとすると、幕末期、長州藩の高杉晋作らが組織した奇兵隊が念頭にあったという可能性も排除できない。それは、身分や門閥を超えた集兵を募り、これに応じて参加した農民や町民、猟師などをも含んだ非正規軍として、政府軍にも決して引けを取らない実力を示したものだからである。あるいはまた、民兵こそが最重要で、かつもっとも効果的であるとする見解は、横井小楠の「国是三論」にも見出すことができる。「身体を強くしたければ猟師、樵夫、農夫が一番である。かれらが暑さ寒さに耐えて労役する力は、とても武士のおよぶところではない。かれらの中から特に強壯なものを選んで三、四ヵ月も武技を訓練した上で敵にあたらせれば、おそらく武士よりも強い力を発揮するのではあるまいか」（前掲書、334）。
- 10) 外交の秘訣は、畢竟^{ひっきよう}「明鏡止水^{めいきようしすい}」の心境で事に当たることサ（『氷川清話』、197）と喝破した勝はまた、剣の極意を会得し、座禅における透体脱落した至純の境地をも我がものとなしえた達人として、腐敗した幕藩体制の存続などまるで眼中には置いていなかったのである。
- 11) たとえば森有礼や伊藤博文など、功を焦った「西洋かぶれ」に唆^{そそのか}され、かえって使節団全体が翻弄されるに至るといふ有り様は、萩原延壽の労作『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄9岩倉使節団』（朝日文庫）に、徴に入り細を穿って活写されているところである。いつの時代にも変らぬ、心ゆしまない逸事と言わなくてはならない。

は、このことが、帰国直後の政府大分裂へと直結する、深刻なひとつの要因になったものと考えられる。

成立まもない明治の新政府が、その外交政策を軸に分裂した「明治六年政変」は、旧来、「征韓論争」をめぐるの軋轢に端を発したものと解釈されており、一般的には、留守政府を預かった参議の西郷隆盛や江藤新平と、岩倉具視を団長とする「遣米欧使節団」に加わった大久保利通ら洋行派との対立の内に見定められている。それによると、西郷は、武力をもってする「征韓論」を強く主張したと言われ、これを思いとどませようとした大久保ら「内治優先派」とが激突、後者による政権奪取とともに、「征韓派」が一斉に野に下ったとされるものである。ところが、両者の対立の経緯とその背景について克明で行き届いた考察を加えた毛利俊彦（『明治六年政変』中公新書と『明治維新の再発見』吉川弘文館）や橋川文三（『西郷隆盛紀行』朝日選書）ならびに松浦玲（『明治の海舟とアジア』岩波書店）らの研究によれば、それは、征韓論争というよりも、むしろ「遣韓大使問題」とでも呼ぶべき性格の問題に他ならなかった。

すなわち、俗にいう「征韓論争」では、西郷が、軍隊による制圧を主張した首謀者のひとりと目されているが、その実、彼は、威儀を正した「遣韓使節」として派遣されることを望んだだけで、信義を尽くして交渉に臨み、仮に志をえないときには、自らの首を差し出しても構わないとするのが、至誠と道義の政治家たるべき者の心得でも、また覚悟でもあったものと思われる¹²⁾。それにひきかえ、大久保ら洋行派は、「政変」によって政権を握るや否や、その翌年、たちまちにして台湾出兵を執行したばかりか、二年後の明治8年9月、江華島事件に際しても、他ならぬ朝鮮に対し、躊躇うことなく軍艦を投入して戦端を開き、その戦後処理に当たっては、自らもまた苦しみ抜いてきた筈の、不平等条約（「日朝修好条規」）を押し付けて憚らなかった。まさに「朝令暮改」とはこのことで、実は、彼らこそ、名実ともに真の「征韓派」だったことを暴露する、もっとも明らかな証明となっている。こうした経緯を総合的に勘案してみるなら、「征韓論争」

12) よくよく考えてみればすぐにも明らかであるように、武断政治を専らにして朝鮮に攻め入るといった意味での「征韓論」ほど、西郷にとって似つかわしくないものもなかったであろう。それは、彼自身の手になる「朝鮮派遣使節決定始末」という申立書や、江華島事件に際し、道理を尽くそうとしないまま、一方的に戦端を開いた政府を手厳しく論難した批判の手紙（いずれも『全集 第三巻』に所収）によっても確かめられるところのものである。また、当時海軍大輔の任にあった勝海舟は、そもそも出動命令はおろか待機指令さえ届かなかつたと述懐しており、西郷には、軍隊を派遣する意図など毛頭なかつたことのもうひとつの傍証となっている。「征韓論ナンテ、馬鹿な事があるものか。西郷の考へも知らないで、その志をつぐなどいふから訳らないのだ。己はあの時、海軍卿だ。戦争のつもりなら、話があらあネ。あとで『一体お前は どうするつもりだった』と話したら、アハハ笑って、『あなたにはわかってませう』と言ったよ。ソレ切サ」（『海舟語録』講談社学術文庫、251）。

における対立は、岩倉具視や大久保利通らを中心とする「遣米欧使節団」の面々によって惹き起こされた、近代日本が、遅ればせながらも自ら帝国主義諸国の一角に加わりとうとするためのクーデターであり、軍事力を背景とした「国権」伸張への転換という、明治新政府の変質が、まさしくここに見られるということなのである。

しかしながら、大久保利通ら「洋行派」の失態と思い違いは、殖産興業に代表される西欧の利点だけにとどまらず、植民地主義に狂奔する国際政治の苛烈なメカニズムに引きずられるあまり、かえって帝国主義列強の悪弊までも、そっくりそのまま模倣してしまったという点にあったろう。それがまた、ストレートに、後の大陸への度重なる軍事侵攻にも道を開くことに繋がったのは、あらためて揚言するまでもないことである。大久保は、さらに、国内の政治体制の整備・構築に際しても、明治6年11月、内務省を創設、自ら内務卿に就くことで悪名高き「有司専制」と呼ばれる中央集権的な官僚体制を導入し、今日にまで続く官僚国家の礎を築くことになったのも、決して無視し得ぬ歴史的事実であった（一汚職疑惑が絶えることのなかった山縣有朋や、策略と陰謀に長けた伊藤博文らに率いられた明治の後継政権は、もとよりその頹落形態であるにすぎない）。

いずれにせよ、近代国民国家による「ナショナリズム」は、国内における専制的な集中支配を確立するとともに、対外的には、膨張と侵略を事とする植民地主義の政治を強行した否定しがたい事実が見落とされてはならない。大久保を中心としたクーデター政府は、こうした風潮に乗じ、武力行使をも厭わない強権をもって臨もうとしたのであって、そうであればこそ、西郷との対立は、ひとり「征韓論」をめぐるのものというよりも、かえって国家経綸の行方を左右する根本的な政治理念の対立に他ならなかったのである。西郷は、後に、庄内藩士らに語り聞かせたと伝えられる『西郷南洲遺訓』の一節で、こう語っている。「文明とは道のあまね普く行わるるを賛称せる言にして、宮室の壮嚴・衣服の美麗・外観の浮華を言うにはあらず、世人の唱うる所、何が文明やら、何が野蛮やらちつ些とも分らぬぞ。（中略）実に文明ならば、未開の国に対しなば慈愛を本とし、懇々説諭して開明に導くべきに、左は無くして未開蒙昧の国に対するほどむごく残忍の事を致し、己を利するは野蛮じゃと申せしかば」（前掲書、31）云々。これらの発言は、それ自体、欧米列強による野蛮で酷薄な武断政治の正鵠をするどく射抜くとともに、大久保ら成り上がり高官への痛烈な皮肉ともいえるべきものになっている¹³⁾。

13) 勝海舟もまた、軽佻にして浮薄な弊風を、厳しく痛撃して止まない人物のひとりであった、「維新いしん已来、この風（一軽挙）ますます旺盛、家屋を改造し、衣冠を変更し、一も彼の法に因らざるなし」「嗚呼、高官、文明に驕きょう矜して下民を圧するなかれ。無用不急の事業を起して国財を空費するなかれ。軽拳浮躁に率先して衆庶の望のぞみを失うなかれ。下情に反して慣習を破るなかれ。朝令暮改、信を失するなかれ」（『解難録』『日本の名著 勝海舟』中央公論社所収、337）と。「衆庶」の失望と不満は、もとより推して知るべしであろう。

パトリオットではあっても、ナショナリストではないということ

明治6年(1873年)10月、西郷は敢然として下野し、鹿児島に帰郷する。そして、その後は、いかなる出仕要請にも、もはや首を縦に振ることはありえなかった。同時に参議を辞任した板垣退助や後藤象二郎らは、翌年1月、民撰議院設立建白書を左院に提出、のちに燃え盛る自由民権運動の魁^{まきがけ}となったが、西郷自身、これには参加していない。彼は、すでに明治4年9月の段階で、「田園生活につよい愛着をもっているため」「中央政府の高官の生活に厭き厭きして」おり、しきりに「早く国に帰りたい」(前掲『遠い崖10大分裂』、146-147)と洩らしていたと伝えられるので、郷里に帰り農作業に勤しむということで、あるいは年来の宿願をようやく果たしたということになるのかも知れない¹⁴⁾。

ちょうどこの頃のものとして推定される「偶成」と題した七言絶句の詩行はこう綴られている。「我が家の松籟塵縁を洗い、満耳の清風身仙ならんと欲す。／謬^{あやま}って京華名利の客と作り、／斯^すの声聞かざること已^{すで}に三年」(新学社、57)。あるいはまた、「温泉即景」はこう唱う、「官途逃れ去って遠く奇を搜り、／神嶺の幽情筆硯随う。／誰か識らん浴余行楽の処、／青山高豁宿雲披くを」(61)と。もしかしたら、「獄に在りて天意を知り／官に居て道心を失う」(62)との心境でもあったろうか、西郷は、事情が許すかぎり、何頭もの獵犬を引き具して山野をあまねく跋涉^{ばっしやう}し、心地よい疲れを覚えては、出湯に浸かり、浩然の気を養うのをこよない日々の愉しみとした。しかし、これをしも遁走癖の表われと称するのは当たるまい。それは、一見、現実逃避と見えて、実は、西郷の本源的な生き方に関わる問題でもあったからである。

したがって、たとえば、今ひとつの「温泉即景」における「幽居夢覚めて茶烟起る、／靈境の温泉世縁を洗う。／地古く山深くして長しなえに晩の若く、／人語を聞かず只天を看る」(147-148)といった深山幽谷の感慨に、単に政治家一流の韜晦を見てはならない。自然の内懐^{うちふところ}に抱かれながら、心底、生命を実感してみること、それこそが、ともすれば近代人が忘れがちで、自然に真向うもつとも真つ当な対応姿勢というものだからである。すなわち、一心に土に親しみ、身の周りの自然や生活環境を慈しむこと、それは同時に、郷土を愛し、ひいては内発的に祖国を大切に想う心根を培うことを意味していた。してみれば、西郷隆盛の風貌姿勢に、「パトリオット」の相貌を想い描いてみるとしても、あながち的外れということにはなるまい。ただ、留意すべきは、パトリオットという存在を決して「ナショナリスト」と混同してはならないという点である。なるほど「パトリオティズム」は、時には、思い余って郷土礼賛に陥ることがないとは言えな

14) たとえば、明治8年4月の大山弥助(巖)宛書簡には、「当今は全く農人と成り切り、一向勉強いたし居り候。初めの程は余程難儀に御座候え共、只今は一日二つか位は安楽に鋤き調べ申し候」(『全集 第三巻』、471)と、「農人」としてすっかり自足した心境を吐露している。

いし、「愛国主義」などと訳されると、煩わしいことの上もないが、その実、それは、家郷意識や愛郷精神の発露に他ならず、他郷（他国）を侵略して憚らぬ強権的なナショナリズムの意図するところとは、まったく異質なものであったことが忘れられてはならない¹⁵⁾。

本来のパトリオティズムは、あくまでも地域への愛に根差し、ローカルな愛郷精神に基づくものである。それゆえに、外からの侵略や内外の暴政に対しては憤ることがあるにしても、兵士の任務は、もっぱら専守防衛に徹することであり、自ら進んで領土の拡張に赴くようなものではありえない。その意味で、それは、地域の文化や自然への慈しみを育むエトスを亡失し、膨張主義的な植民地政策に邁進するナショナリズムとは、明らかに異なるものとして捉えなければならない。そして、この点にこそ、ますますナショナリストとしての様相を強めていった大久保政権とは対照的な、パトリオットたる西郷隆盛の真面目が垣間見られるのだと言っている¹⁶⁾。

西南戦争の顛末と「西郷星」への翹望^{ぎょうぼう}

先述した「明治六年政変」での下野に際し、実は、薩摩出身の将校や兵士たちも、数多く西郷と行動を共にした（一説には、600人を数えたとも言われる）。西郷は、おそらく彼らを路頭に迷わせることに忍びなかったのであろう、明治7年6月、懇請されるがまま郷中制度の発展形態としての私学校を創設、併せて農業や学問を教える幼年学校や吉野開墾社をも開設し、壮士や青少年の教育に当たった。その目的とするところは、主として人材の育成と、来るべき将来の国難に備える兵士の養成にあったものと思われる

15) 因みに、パトリオティズムとナショナリズムを同一のものとして捉える不明^{たが}し、ナショナリズムを排したパトリオティズムこそ肝要だとして、その歴史的系譜を跡付けた著作にマウリツィオ・ヴィローリの『パトリオティズムとナショナリズム』（日本経済評論社）がある。ここでは、たとえば「抑圧者に対する憤りと嫌悪によってパトリオットは行動へと駆り立てられ、その闘争に加わるように他者に求める。彼の献身は永続するものである。なぜならばそれは、祖国への愛、公共の自由への愛によって支えられており、その愛は、幾つかの点では異なるがみな同国人であり、抑圧の犠牲者であるような特定の人々に対する、慈愛に満ちた愛である」（251）との定義づけがなされている。こうした観点に立つならば、パトリオティズムは、貧困からの脱却を願ひ、不正や抑圧への怒りと自由・公正への志向を抱懐しつつ、なお世界にも開かれているという、ユートピア的ヴィジョンともまたひとつなのだと見ることがゆるされよう。

16) 固有の生活文化に基づき日々の安寧を希求する民衆の切実な願いや、草莽の臣としての矜持を等閑視し、ひたすら浅薄な近代主義に走ろうとすると、実はすでに、ナショナリズムへの頹落が始まっているのである。それはむしろのこと、寛容と思いやりに充ちた地域文化や生活現場のディテールを救いあげられない形式至上の官僚主義ともまた決して別のものではない。

が、家格や禄高に囚われることのない、開かれた人材登用を行なった点は、あるいは小楠の「国是三論」の旨趣とするところや、勝の私塾といった身近な先例が念頭にあったせいかも知れない。

時あたかも、大久保を中心とする政府は、各地で頻発する不平兵士の叛乱の弾圧に躍起となっており、とりわけ佐賀の乱（明治7年2月）の平定に際しては、首謀者と決め付けた江藤新平を梟首刑に処するといった蛮行をすらすら辞さなかった。同時に、讒謗律や新聞条例などを相次いで制定、露骨な言論の封殺に乗り出す一方、しきりに軍備の拡張を図って、ますます強権的な中央集権の国家主義を強める趨勢にあった（それは、ちょうど台湾出兵ともほぼ同時期のことで、対外膨張的なナショナリズムと相即的であったことが確認できる）。そうした背景のもと、強大化する鹿児島県の動きに神経を尖らせていた政府は、密かに密偵を派遣し、政情の偵察に努めるとともに、夜陰に乗じて火薬庫を襲撃、武器弾薬を運び出そうと画策した。これに反発した血気盛んな私学校の生徒たちは、激しい憤りを抑え切れず、さらに西郷暗殺の密命を帯びた刺殺者までが送り込まれたとの情報もたらされるに及び、ついに「暴発」、いわば政府の挑発に乗せられたようなかたちで「西南戦争」の幕が切って落されることになった。

この時、西郷はとりわけ寡黙で消極的であったと伝えられるが¹⁷⁾、「今般政府に尋問の筋これあり」との届書を擁して遂に決起したとき、それは、専制政府への強い抗議の表明であり、地方文化と民衆の視点に立脚した異議申し立ての行動に他ならなかった¹⁸⁾。そして、まさにそれゆえにこそ、儚くも潰えた民衆の悲願は、自由民権運動の地下水脈となって深く静かに潜行し、他方、西郷の今生が、今まさに城山の露と消え去らんとしたその矢先、南洲復活への翹望は、暮れ泥む初秋の宙にひときわ大きな「西郷星」として天翔ったのである。

17) たまたま鹿児島県に滞在し現場に遭遇したアーネスト・サトウは、あたかも「虜囚」にも似た西郷の姿を「西郷には約二十名の護衛が付き添っていた。かれらは西郷の動きを注意ぶかく監視していた」（前掲『遠い崖 13 西南戦争』、14）との表現で伝え、「西郷は名目的には指導者であるが、現在の叛乱の首謀者たちのうち、もっとも積極的な推進者ではなく、その役割をはたしているのは、篠原国幹であると言われている。もうひとりの首謀者の桐野利秋は、以前は中村半次郎と名乗り、戊辰戦争で名をあげた男である」（同上、65）とも書いている。この頃すでに盟友ともいえた勝もまた、西郷の積極的な関与を認めない一人であった。「しかし何にしてもあれほどな人物を、弟子のために情死させたのは、惜しいものだ。部下にも桐野とか、村田とかいふのは、なかなか俊才であった。西郷も、もしあの弟子がなかったら、あんな事はあるまいに、（中略）とにかく西郷の人物を知るには、西郷くらいな人物でなくてははいけない。俗物には到底分らない。あれは、政治家やお役人ではなくて、一個の高士だものを」（『水川清話』、337-338）。

「賊臣」への非難の大合唱と西郷擁護の論陣

戦役中、現地ルポをも含め、西郷伝説すら流布することに狂奔した新聞雑誌メディアは、事変後、「賊臣」としての西郷隆盛非難の大合唱へと、臆面もなく転向する。これには、さすがに義憤の衷情を押し隠せなかったものと見え、脱亜入欧を主唱する文明開化論者であった福沢諭吉にしてさえも、憤懣やるかたない思いで、「明治十年丁丑公論」と題する西郷擁護の檄文を草するに至る。この一書は、筐底の奥深くしまわれて長らく公開されることがなかったものであるが、「世界に専制の行わるる間は、これに対するに抵抗の精神を要す。その趣は天地の間に火のあらん限りは水の入用なるがごとし」（『丁丑公論・瘦我慢の説』講談社学術文庫、9）と説き起こし、「西郷は決して自由改進黨を嫌うにあらず、真実に文明の精神を慕う者というべし」と顕彰した上で、「西郷の死は隣むべし、これを死地に陥れたるものは政府なり」（45）とまで断罪している。また、「明治七年内閣の分裂以来、政府の権はますます堅固を致し、政權の集合は無論、府県の治法、些末の事に至るまでも一切これを官の手に握て私に許すものなし」（41-42）と難詰して専制集權の非を鳴らし、「有名無実と認むべき政府はこれを顛覆するも義において妨げなき」（29）ものとの造反有理を主張した上で、「西郷は天下の人物なり。（中略）他日この人物を用るの時あるべきなり。これまた惜むべし」（46）と結んで、満腔の弔意を表したのであった。

無教会派のキリスト者であった内村鑑三もまた、西郷を尊崇することにかけては、決して人後に落ちるものではなかった。内村は、代表作のひとつ『代表的日本人』の巻頭

- 18) サトウはまた、後年における回顧談ではなく、まさにリアルタイムでの勝率直な発言をこう紹介している、「この内乱を終わらせるもっとも簡単な方法は、大久保と黒田が辞職することである。」「薩摩人が望むことは、新しい御門を立てることでなくてもなければ、現在の御門の身柄を預かることでもない。そうではなくて、たんに廟堂につらなる薩摩人のうち、これまで国政を誤ってきたと見なされる者の解任である」（『遠い崖 13 西南戦争』、91-92）。また、松浦玲は、海舟研究の立場から、大久保との関係を推察し、「西南戦争で西郷軍の矛を収めさせるには大久保利通罷免しかないという海舟の判断は、全くその通りであろう。西郷を拳兵に追い込んだのは、大久保独裁体制である。海舟は台湾出兵のころから大久保体制にがまんならなくなり、江華島事件から日鮮修好条規にいたる大久保政府の朝鮮強圧策にも当然ながら反対だったので、大久保利通を糾弾する西郷一党には共鳴しやすい」（『明治の海舟とアジア』岩波書店、25）と判断している。さらに、<史伝もの>の一書というべき『西郷と大久保と久光』（朝日文庫）の著者である鹿児島出身の作家海音寺潮五郎は、西南戦争時における西郷の心事を忖度し、「それでは、もし西郷が被弾せず、ついに官軍に捕えられたとしたら、どうしたでしょう。私は、彼は生きつづけて、裁判の場において、大久保らと対決して、堂々と所信を開陳し、大久保の政治を難詰し、維新の初一念を回復せよと要求してやまなかつただろうと思います。この形で、天は自分に使命を課しているのだと信じたはずです」（236）と書いている。いずれも肯綮に申っているというべきであろう。

に「西郷隆盛—新日本の創造者」を掲げ、「一八六八年の日本の維新革命は、西郷の革命であった」（岩波文庫、23）と称揚している。したがって、明治10年の叛乱も、その後、「維新革命が、西郷の理想に反する結果を生じたため」で、「自分の生涯の大目的が挫折した失望の結果である」（33）と受け止める。さらに、「もしわが国の歴史から、もっとも偉大な二人をあげるとするならば、私は、ためらわずに太閤と西郷との名をあげます」（48）と高らかに言挙げし、「西郷には、純粹の意志力との関係が深く、道徳的な偉大さがあります。それは最高の偉大さであります。西郷は、自国を健全な道徳的基盤のうえに築こうとし、その試みは一部成功をみたのであります」（49）と締めくくっていてもいる。西郷に対する最大級の評価と言わなければなるまい。

そして、極め付きは、自由民権運動の闘士にして筋金入りの民権論者中江兆民の場合であろう。兆民は、西郷について自ら筆を執って書き記したものは少ないが、高弟であった幸徳秋水の『兆民先生・兆民先生行状記』（岩波文庫）が、興味深いエピソードを伝えてくれている。それによれば、留学から帰朝した直後の兆民が、「策論」一編を引つ提げ、海舟を介して登用の道を探った際、拝謁を願って談判に及んだ島津久光が返事を洩るのに対し、「公宜しく西郷を召して上京せしめ、近衛の軍を奪ふて直ちに太政官を囲ましめよ、事一挙に成らん、今や陸軍中乱を思ふ者多し、西郷にして来る、響の応ずるが如くならん」（15）と言いつ放ったという。また、「若し西郷南洲翁をして在らしめば、想うに我をして其材の伸ぶるを得せしめしならん、而して今や即ち亡しと。語此に到れば常に感慨に堪えざる者の如くなりき」（16）と、その悲嘆ぶりを記すとともに、「先生又海舟翁の談に依て、西郷南洲翁の風采を想望し、欽仰措かず、深く其時を同じくせざるを恨みとせり」（15）と、心底深い痛恨の思いをも報じている。どうやら西郷隆盛は、兆民にとってもまた、単に身体的にというだけでなく、最大限の賛辞を呈すべき、尋常ならざるスケールの偉丈夫だったようなのである。

このように見てくれば、その主義主張や立場を超えて、西郷を賞讃する人々はまこと

- 19) さらに今ひとつ言い添えるとするなら、夏目漱石が、池辺三山の著書『明治維新 三大政治家』に寄せたはしがき（「池辺君の史論に就て」）のなかで、自らの朝日新聞入社の際、使者に立った池辺の来訪時のことについてこう記している。「話をしているうちに、どういふわけだか、余は自分の前にいる彼と西郷隆盛とを連想し始めた。そうしてその連想は彼が帰った後までも残っていた。もちろん西郷隆盛について余は何の知る所もなかった。だから西郷から推して池辺を髣髴するわけではないので、むしろ池辺から推して西郷を想像したのである。西郷という人も大方こんな男だったのだらうと思ったのである。（中略）これまで（入社）の話が着々進行してほほ纏まる段になったにはなったが、何だか不安心な所がどこかに残っていた。然るに今日始めて池辺に会ったらその不安心が全く消えた。西郷隆盛に会ったような心持がする」（中公文庫、12）。へそ曲がりて知られた漱石が、他でもなく池辺の風貌に西郷を連想した途端、たちまちにして安心の心情を確かなものにしたというのも、なかなか味わいがあって微笑ましい。

に多士濟々で、いかにも宏大な西郷讃仰の裾野の広がりが偲ばれようというものである¹⁹⁾。

奄美諸島における^{るたく}流謫の日々—洋行することばかりが、^{てだて}学の手策ではないということ

維新前後の赫々たる事績に眩惑され、つい見落してしまいがちになるとはいえ、西郷は、決して順風満帆の生涯を送ったわけではない。稀代の名君との誉れ高かった島津斉彬の後継藩主忠義の後見久光との折り合いが芳しくなく、二度（算え方によっては三度）にわたり、何と都合五年間にもものぼる遠島処分を申し渡され、奄美群島での雌伏の歳月を送っているのである。それにもかかわらず、いや、そうであったからこそというべきであろうか（—西郷が流された当時の奄美諸島は、いずれも砂糖黍のプランテーション栽培を強要される薩摩藩の植民地領のような地位に置かれていた）、この時の流謫の日々こそが、その後の維新革命を決定づける「明瞭なヴィジョン」（内村鑑三）を育む切っ掛けになったものと思われる²⁰⁾。

とはいえ、さしもの西郷も、当初は慣れない^{たつきよ}謫居生活には馴染めなかったようで、いくつかの不満や不快感を隠していない。しかしながら、人情の機微に触れ、^{しまびと}島人の厚意にもほだされて、次第にこころを開いてゆく。やがて親しく交わることの可能な知己や後援者に恵まれた大島の^{たつこう}竜郷では、愛加那という名の島妻を娶り、一男一女をもうけるとともに、学習塾を開いて読み書きを教え、興味深い逸話を語っては子供たちを興がらせた。そして、おそらくは、そうした生活体験があったればこそ、何よりも「敬天愛人」の志操を培うことができたのだらうと了解される²¹⁾。

西郷はまた、薩摩藩の圧政下に置かれ、搾取と取奪にあえぐ農民たちの相談にも乗っ

20) 内村鑑三は、先にも触れた『代表的日本人』に次のようなエピソードを書き留めている。「長年の追放が終わり、西郷を元の責任ある地位に呼び戻す使者が、流された島に送られたときのことです。西郷は海辺の砂に、新国家の建設のために頭に描いていた諸策のすべてを、図示して語ったと言われます。そのとき西郷の示した予見が、あまりにも事実当たっていたのに驚き、話を聞いた使者はのちに、思うに西郷は人間ではなく神である、と友人に告げたほどです」（43-44）。

21) 西郷の把持した「敬天愛人」の理念とは、たとえばこういうものである。「道は天地自然のものにして、人はこれを行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給う故、我を愛する心を以て人を愛するなり。／人は相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を尽し人を咎めず、我が誠の足らざるを^{あや}尋ぬべし」（新学社、35）。なお、奄美群島での西郷の生活については、脇野素粒の『流魂記 奄美大島の西郷南洲』（丸山学芸図書）と益田宗兄『西郷隆盛と徳之島』（浪速社）が参考になる。また、牢居をも含む沖永良部島での暮らしぶりについては、本部広哲『西郷隆盛 沖永良部島の南洲塾』（海風社）がある。

て、代官たちの姦計や不正を正し、苛政に喘ぐ貧民たちの救済を図ったことが知られている。その結果、元治元年3月初旬、沖永良部島を離れるに当たっては、砂糖買占め方の改善方策を建言した「上申書」を認め^{したた}たのをはじめ、「与人・間切横目役大躰」を授けて役人心得を説くとともに、飢饉や凶作などの緊急時に備えるための社倉制度の創設を提唱する「社倉趣旨書」をも起草している（—これは、後に実行に移された）。ここには、明らかに民衆の暮らしぶりに寄り添った民権思想の原基とも呼ぶべきものが顔を覗かせている。それはまた、内村のいう「明瞭なヴィジョン」ともひとつながりのもので、ありうべくんば、「有司専制」への対抗図式として、帝国主義的な膨張政策の歯止めともなるべき性格のものであった。

一方、奄美諸島での生活は、西郷自身にも大きな成果をもたらしている。西郷は、もともと知行合一を旨義とする陽明学徒であったが、遠島処分を奇貨^{きか}として、さまざまな漢籍を読み耽り、慌^{あわただ}しい日常に紛れるなかでは叶わない、厳しい精神修養にも励んでいる。特に牢居を強いられた沖永良部島では、座禅を組み、書を良くし、漢詩にも集中して打ち込むという精進ぶりであった。この時、親交のあった、同じく流人の陽明学者で、漢詩や書道に精通していた川口雪蓬^{せっぽう}は、のちに、鹿児島における西郷宅での留守居役を引き受けるまでに至っている。このような意味で、奄美への遠島が、西郷にとっては、一身をもって学ぶ留学にも匹敵すべきもの、若しくはそれ以上に重大な意義をもつものになったのである²²⁾。

群島性のヴィジョンと民権思想の原基

それにしても、内村鑑三のいう「明瞭なヴィジョン」の基底を成したものはいったい何だったのか。この課題を探るためには、海洋に浮かぶ奄美群島に「琉球弧」というイメージを重ね合わせて見るのもあながち無駄なことではないと信じる。長年、奄美大島の名瀬に住みついた作家の島尾敏雄は、「琉球弧」という視点から日本列島を捉える「ヤポネシア」像を模索したが、西郷もまた、湾を巡り、浜を見下ろし、何度も帆船や漁船で周航することを通して、奄美諸島と薩摩との地理的關係をしっかりと脳裏に刻み込んだに違いない。しかし、それは、単に両者の間にのみとどまるものではなかったであろう。珊瑚礁の隆起によってできた島は、その端々が「暗河^{くらごう}」という地下水脈を通じて相互に結び合っているように、海を介して台湾や朝鮮半島と、さらには中国大陸とも繋がっているという、四海同胞の思いを新たにしたのではなかったか。それは、たとえば

22) それどころか、むしろ西郷の心がもっとも安らいでいたのは、ひょっとすると、多くの新しい知己を得た奄美での謫居生活においてであったと言ふべきかも知れない。たとえば「偶成」と題する七言絶句にはこう詠われている、「世上の毀譽^{かう}軽きこと塵に似たり、/ 眼前の百事偽か真か。/ 追思すれば孤島^{たのしみ}幽囚の楽、/ 今人に在らず古人に在り」（106）と。

漢詩「逸題」の四行からもはっきりと窺い知ることのできるものである。「海水洋洋万里流れ、/ 晩来無事吟魂^{きんこん}を為す。/ 琉球の邦域雲際^なに連り、/ 三十余洲一様の秋」（新学社、58）。ここには、島同士が、それぞれ独立した固有性と多様性を保持しつつ、なお海と波とを介して世界にも開かれてあるという、いわば「群島性のヴィジョン」とでも呼ぶべきものが想い描かれているのだと見るのがゆるされよう。このような地政学的観望は、独自性を保った地域同士が対等の関係で結び合う水平的なネットワークの構図に思いを致す心性をも育むものであり、その意味で、それは、領土拡張の野望を隠さない帝国主義の覇権意識とはまったく理路を異にするものであったと言わなくてはならない²³⁾。

このことと関連し、あらためて留意すべきは、自存と開放のネットワークが、上意下達^{じょういしかたつ}の中央集権的な国家観とは、あくまで対極をなすという一点であろう。ここで、重きが置かれるのは、国権よりも民権の伸長であり、そもそも国家的道徳は、常に個人の道徳よりも低次元のものに過ぎないと認識することである。しかしながら、庶民の生活感覚にしっかりと定位し、民衆の切なる願いにも寄り添って、ことばの真の意味における民権を実現するような仁政が見果てぬ夢に留まり続ける限り、透徹した現実感覚を磨くためにも、繰り返し歴史を紐解き、必要に応じ、想像力をもまた逞^{たくま}しくしてみなければならぬ。そうであれば、幕末維新期の政局が、風雲急を告げる京洛の巷^{ちまた}へと、何度も西郷自身を召還していかざるをえなかったように、120年後の今日においてもなお、西郷の精神は、折に触れ、幾度となく呼び戻されてしかるべきなのではあるまいか。

23) 今福龍太は、『群島—世界論』（岩波書店）と題した長編論考において、世界を群島として捉えて見ることにより、まったく新たな世界のあり方を幻視しようとしている。そこでは、「群島性」にまつわる各種のヴィジョンが幅広い目配りの下に博搜されており、裨益されるところが少なくない。

